

昭和の南海地震体験談

氏名:尾崎 英生(おざき ひでお)
生年月日:昭和4年12月19日
地震を体験した場所:すさみ町
当時の家族状況:父、母、兄、弟、妹、お手伝いさん



1) 地震発生時の状況

当時 17 歳。離れの二階で、兄と寝ていて“グラッ”と来て飛び起きた。

兄に、「早く二階から降りよ！」と言うが、階段の前の襖が、外れて倒れていて、「降り口無い！」と、兄が言った事を覚えている。

中学校の地学の先生が、毎時間ごとに、大地震が来るという予想をしていたので、「逃げる時には、布団を持って」とか「道で逃げる途中、棒切れを拾って行け」と言ったので、私は、それを思い出して、布団を持って家の外に避難した。

父母が、まだ出てこなかったもので、外から急かして、裏の畑に一時避難した。海の方で「津波来る！」と言う叫び声があったので、裏の小学校の山に避難した。

2) 津波襲来時の状況

地学の先生が、30m 級の津波を予想していたので、地震の時の心構えがあったのと、兄が、当時 18 歳で、学校の依頼で、京大の設置した[験潮儀]から、プリントアウトされる紙を、ちぎって学校に届けていたので、近いうちに地震が来るのは判っていた。それまでの小規模な地震は、顕著に一週間前などに、振れ幅が紙に出ている、2 年前の東南海地震の時は、白紙状態が一ヶ月間、続いた、この南海地震の時も、一ヶ月間、白紙だったので、どんな大規模な地震が来るのかと、学生達で話していた。

小学校の山には 30~40 人避難していた。貴重品など持たず、私の持っていった布団が、唯一の物で、12 月の事に、弟妹の寒さを防いだ。

3) 家族の行動・被害

家族全員、小学校の山に逃げて、無事

4) 集落・周囲の被害

同じ山に逃げていた、海辺に住むお婆さんが、「家が無い」と言って、泣いているので、(そんな事あるか、)と思いながら海辺を、見に行くと、本当に何も無くなっていた(土台まで無くなっていた)ので驚いた。

また、近所に住む、地震前から「死にたい」と口走っていた、親戚の叔母さんを、父が心配して「見てきてくれ」と言われ、兄と二人で見に行く。途中、町中が、瓦礫や流出家屋が、散乱していて、靴では危ないと、家に下駄を履きに帰ると、家の壁は壊れていたが、家は無事であった。

叔母さんの家に、たどり着いたら、叔母さんは寺に逃げて無事であった。

5) 地震・津波後の生活

後日談で、同級生たちと、津波の話をしていて、海を見に行ってから寺に避難して来た同級生は、途中、波が急で動けずに立ち止まった所、足に何か触るので、払っても又触るので、何かと引いて引き揚げたら、女の子で、掲げて、寺に運んで、蘇生させた。

家は、小学校の山から戻って、皆で洗い、修理して住んだ。

その後の生活は、普通に学校に行ったと思う。復旧もゆっくりだったと思う。

6) 次の災害への備え

自分の体験から、何はともあれ自分で逃げる。自分の命は自分で守る。身一つでいいから近くの高い所に避難すること。自分のことが出来てから次に父や母やお祖父ちゃんお祖母ちゃんのこと、荷物も一緒に、あれこれ持たずに、又、取りに戻ったりせずとにかく避難する事。と、来院する子供には言っている。

7) その他

S19の東南海地震では、家の屋根ひさしが落ちていた。